

WICI Symposium 2010

統合的ビジネスレポーティングへの挑戦 ～どう行動し、何を伝えるか～

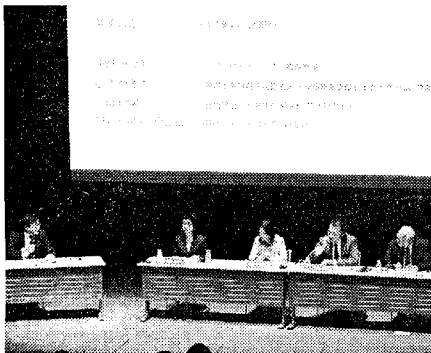
日本経済新聞社クロスメディア営業局はこのほど、WICIと共催で「WICI Symposium 2010」を開催した。内部統制のありようや国際会計基準(IFRS)への対応など、企業情報の透明性に対する関心が高まる中、ビジネスレポーティングのあり方について様々な角度から専門家が議論した。以下、その要旨を紹介する。

Session 2 企業の多面的な姿を伝えるために - CSR報告はどこにむかうのか

CSR報告に必要な経営戦略の視点

企業の社会的責任(CSR)報告は、多くの課題を抱えている。例えば、①財務報告書や環境報告書など情報量が多い割に相互の関連づけがない②複数の企業の取り組みを比較・検討するための指標がない③CSRの解釈が社会貢献や企業倫理向上など内向きのものにとどまる——などだ。

問題の背景は共通している。CSRに経営戦略の視点が欠けているのだ。投資家が求めているのは「CSRが企業価値向上にどう寄与するか」というストーリーである。例えば、社員の省エネ活



■モデレーター
平塚 敦之氏 経済産業省 企画官

■登壇者
海野 みづえ氏 創コンサルティング代表取締役
小澤 ひろこ氏 新日本有限責任監査法人 SMG推進プロジェクトチーム マネージャー
江良 明嗣氏 日興アセットマネジメント アナリスト
マイク・クルズ氏 グランドソントン パートナー

財務・非財務情報の統合が国際的な動きに

動が財務面でエネルギーコストをどれだけ削減させたのかを説明できれば評価の視点が変わる。企業の目指す将来像を明確に発信するという役目を果たしてこそCSR報告に価値が生まれる。経済のグローバル化に伴い、人口増加や資源枯渇など、企業を取り組むべき社会・環境問題も地球規模に広がった。CSR戦略そのものを見直す局面を迎えている。

CSR報告のあり方も見直しが迫られている。今年8月には、国際的な会計報告のフレームワーク開発を目指すIIRCが発足を

た。目標は、ESGなど非財務情報と財務報告の統合だ。

現状ではCSR報告は企業の任意で発行されているが、その量・質ともにばらつきがあり、財務情報との関連づけも薄い。すでに欧米の先進的な企業はCSRを「経営戦略上重要な要素」とみなし、年次報告書へのCSR情報統合などを始めている。スイスに本拠を置くノバルティスグループはその好例だ。7年前から統合レポートを発行し始め、自社のCSR活動が企業価値向上にどう役立っているのか、説得力のあるストーリーを投資家や非政府組織(NGO)などあらゆるステークホルダーに示している。CSR報告を「企業の義務」とみなす動きが世界的に強まる中、これからのCSR報告は、財務情報と非財務情報をリンクさせながら、いかに経営戦略を描き出すかが問われることになる。経営トップ直結のCSR部門配置や、投資家との対話などを通じて、CSR報告を進化させる取り組みが求められる。